

日本物理学会物理学史資料委員会ニュース

No. 4

編集・発行 日本物理学会物理学史資料委員会

2022年2月16日

一般社団法人 日本物理学会 物理学史資料委員会では、年3~4回の委員会議において、主として日本国内の物理学史資料の保管・収集などに関して情報交換を行っています。『日本物理学会物理学史資料委員会ニュース』は、その情報の一部をウェブ上で紹介するために刊行されています。

正確な内容をお届けするよう心がけますが、同委員会の委員の報告をもとに速報性を重視した構成とするため、情報が十分でない可能性があります。詳細については、関連する機関等に別途ご確認いただけますようお願い申し上げます。

《目次》

- 広島大学旧理学部1号館の企画展示が開催されました
- 京都大学湯川記念室の展示がリニューアルされました
- 久保亮五生誕百年記念展が開催されました
- 森一久氏資料が核融合アーカイブ室へ移管されました
- 名古屋大学坂田記念史料室の資料目録第二集の資料のスキャンが完了しました
- 日本物理学会第75回年次大会（2020年3月、名古屋大学）での企画のその後

（原稿受付順）

●広島大学旧理学部 1 号館の企画展示が開催されました

日本物理学会第 68 回年次大会（2013 年 3 月、広島大学）にて行われた物理学史資料委員会による企画展示「三村剛昂と広大理論物理学研究所」の展示物の一部を使い以下の企画が 2020 年 11 月に旧日本銀行広島支店にて開催された。

被爆 75 年特別企画「広島大学旧理学部 1 号館～未来へ受け継ぐ記憶～」

期間：2020 年 11 月 1 日（日）～11 月 12 日（木）

会場：旧日本銀行広島支店 1 階（広島市中区袋町 5 番 21 号）

主催等：主催 広島市、共催 広島大学、協力 日本物理学会物理学史資料委員会、
後援 公益財団法人広島平和文化センター

会期中の入場者は 900 名ほどであった。

（小長谷大介委員）

●京都大学湯川記念室の展示がリニューアルされました

京都大学基礎物理学研究所湯川記念館の湯川記念室（旧所長室）がリニューアルされ、常設展示「湯川秀樹と読書—ノーベル賞物理学者の原点—」が 2021 年 7 月 19 日より始まっている。

展示の詳細と観覧予約は以下のウェブサイトを参照。

常設展示「湯川秀樹と読書」の観覧予約案内：

<https://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/tenji>

「ザッツ・京大」での紹介：

<https://www.thats.pr.kyoto-u.ac.jp/2021/07/28/11568/>

（小長谷大介委員）

●久保亮五生誕百年記念展が開催されました

東京大学 大学院総合文化研究科 教養学部 駒場博物館において、下記の通り、戦後の物性論・統計物理学を牽引した久保亮五の生誕百年を記念する展示が開催された。

久保亮五生誕百年記念 「原理の学」に魅せられて

—物理学者・久保亮五の研究と人生展

期間：2021 年 9 月 18 日（土）～11 月 28 日（日）

会場：東京大学 大学院総合文化研究科 教養学部 駒場博物館
主宰：久保亮五生誕百年記念展実行委員会、東京大学駒場博物館
協力：東大駒場友の会

久保の研究の軌跡を物語る手稿や手紙、写真などと合わせて、久保が学んだ第一高等学校や東京帝国大学における教育に関する資料も展示された。同時開催された展示と合わせて、1894人の来館があった。

展示の概要は下記のウェブサイトに掲載されている。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/2021.html#kubo2021>

(岡本拓司委員)

●森一久氏資料が核融合アーカイブ室へ移管されました

原子力の平和利用に生涯を捧げた元原子力産業会議副会長森一久氏（1926－2010）の資料が2021年11月神奈川県森氏宅から岐阜県土岐市の核融合科学研究所核融合アーカイブ室へ移送、保管された。資料群の構成は森一久氏が遺した原子力に関する文書、蔵書、雑誌、冊子、私信、日記、手書き原稿、メモなどで、文書資料約1700点、蔵書、雑誌、冊子等400冊あまりからなる。戦後間もない原子力黎明期から原子力発電が現在の状態に至った経緯を明らかにするには不可欠な資料が多い。

森一久氏は1944年京都大学理学部物理学科に入学し湯川秀樹研究室で原子核物理を学んだ。在学中の戦争末期、両親を案じて帰省した広島で被爆して、両親、長兄家族など5人を失い、本人も原爆症で3か月間生死の境をさまよひ九死に一生を得た。復学できたのは翌年の5月である。卒業後、湯川秀樹教授の推薦で中央公論社に入社し、科学雑誌『自然』の編集に従事した。国際的に評価の高いアメリカの科学雑誌『サイエンティフィック・アメリカン』から原子力に関する記事などを『自然』に載せ、原子力に関する情報の少ない時代に重要な情報提供の役割を果たした。その後、原子力産業会議の立ち上げに参加したことから、中央公論社を辞し、原子力産業会議に仕事の間を移す。当時、同会議は日本の原子力の進むべき方向を公開の場で議論したり、原子力の基本的な問題を研究して、原子力委員会や通産省に政策提言したりしていた。やがて同会議の事務局長を経て、副会長まで務めることになるが、あくまで原子力の安全を優先する森氏の立場は、しばしばエネルギー政策を決定する国の政治の立場や利潤を追求する産業界の立場と相容れず、終には原子力産業会議を去ることとなる。しかし、その人生は原子核物理を学んだ科学者としての矜持を保ちながら原子力発電の推進に寄与したと言えよう。《「森一久(元日本原子力産業会議副会長)オーラルヒストリー」近代日本史料研究会 2008 参照》

2008年京大湯川研究室の同窓会で菅野禮司大阪市立大学名誉教授は初めて森氏と知り合い、亡くなるまでの短い期間親しい交流が続いた。森氏没後の2011年東日本大震災に伴

い福島第一原発の事故が起きた時、菅野氏は、これまでの日本における原子力発電の政策が根本から検討を迫られていると感じた。そして秘話など未公表の記録を含め森氏の遺した資料を纏めておくことに意味があると考え、湯川門下の曾我見郁夫京都産業大学名誉教授、高田容士夫会津大学短期大学部名誉教授と共に資料の整理・保存の作業をすることとした。さらに、原子核実験の専門家である井上信京都大学名誉教授（元京都大学原子炉実験所長）、原産時代の協力者喜多尾憲助放射線医学総合研究所名誉研究員、森氏の評伝を出版した藤原章生毎日新聞記者が加わり6名の森一久資料編集会が結成された。その成果がハードカバー製本の森一久論説・資料目録「原子力とともに半世紀」である。資料目録作成の理由を読むと、この作業に参加したのは単に森氏の生き方や私利私欲のない人柄に感銘しただけではなく、特に物理の研究者からは資料を残して今後の原子力の方向を検討する必要があるとの責任感が感じられる。この森一久資料総目録は、京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室 森一久資料室(<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~yhal.oj/Mori/index.html>)で閲覧できる。《「原子力とともに半世紀 森一久論説・資料目録」森一久資料編集会 代表/菅野禮司 2015 参照》

核融合研究のリーダーとして活躍した元プラズマ・核融合学会会長森茂氏（1923－2018）は一久氏の実兄である。原爆で家族を亡くしたにも拘わらず兄弟ともに核融合、核分裂の原子力分野でエネルギー開発に尽力した。核融合アーカイブ室は、この森氏兄弟の調査過程で資料目録「原子力とともに半世紀」に出会い、資料の移転先を探していた編集委員会に保管を申し出た。編集委員会および森禮子氏（故森一久氏夫人）から保管場所として適当との判断を得て核融合アーカイブ室に資料が保管されることとなった。

（執筆：木村一枝（核融合アーカイブ室協力員））

（報告担当：難波忠清委員）

●名古屋大学坂田記念史料室の資料目録第二集の資料のスキャンが完了しました

名古屋大学坂田記念史料室所蔵の資料目録は、史料室のホームページ

<http://www.eken.phys.nagoya-u.ac.jp/introduction/sakata/>

に、坂田記念史料室資料目録[第一集][第二集]として掲載されている。第一集の資料は既にもスキャンが終わっていたが、この度、第二集の資料のスキャンも完了した。坂田記念史料室では、これまで資料の閲覧は現地に来訪されることを基本としてきたが、新型コロナウイルス感染問題が解決しない中、メールで資料閲覧を希望されたら、坂田記念史料室長の判断で、個人情報など、資料の内容に公開に問題がない場合、可能な限りスキャンされた資料をメールで送付するように対応することになっている。

（岡本祐幸委員）

●日本物理学会第 75 回年次大会 (2020 年 3 月、名古屋大学) での企画のその後

日本物理学会第 75 回年次大会 (2020 年 3 月、名古屋大学) の会期中に予定されていた領域 12・13 のシンポジウム「コロイドから生体分子まで：生物物理学の誕生と発展」(大澤文夫の業績についてのシンポジウム、企画：岡本祐幸、郷通子)、領域 13 のシンポジウム「名大物理学教室の礎を築いたパイオニア」と名古屋大学博物館の企画展示「名大物理学教室の礎を築いたパイオニア」(後者 2 つの企画：有賀暢迪、稲葉肇、小長谷大介、岡本祐幸) は、新型コロナウイルスの感染拡大により、年次大会そのものが中止となったために、全て中止となった。しかし、領域 12・13 のシンポジウム「コロイドから生体分子まで：生物物理学の誕生と発展」は、同じタイトル、(講演が一つ追加された) ほぼ同じプログラムで、2020 年 9 月 16 日に第 58 回日本生物物理学会年会でオンライン開催された。

また、名大博物館の激励と協力を得て、2020 年 11 月 17 日から 28 日までの期間、上の名大博物館企画展示 (主催：日本物理学会物理学史資料委員会、名古屋大学博物館) は延期開催された。坂田昌一 (素粒子物理学)、早川幸男 (宇宙物理学)、上田良二 (物性物理学)、大澤文夫 (生物物理学) の 4 人に関する資料が展示されたが、新型コロナウイルス禍中にも関わらず、約 300 名の来館を得た。その後、展示に使われたパネルは、名大博物館の物理学関係の常設展コーナーに置かれた。更に、上の領域 13 のシンポジウム「名大物理学教室の礎を築いたパイオニア」で登壇予定だった 4 人に、講演の代わりに、日本物理学会誌の「歴史の小径」への寄稿が提案され、以下のように刊行が完了した。

早川尚男、「早川幸男の生涯と物理 — 素粒子現象論から宇宙物理へ」第 75 巻 10 月号、pp. 644-647 (2020).

田中信夫、「上田良二と電子線物理学の発展」、第 76 巻 1 月号、pp. 45-47 (2021).

西谷正、「坂田昌一 — 素粒子論における物理と方法」、第 76 巻 5 月号、pp. 308-311 (2021).

岡本祐幸、「大澤文夫の生涯と物理」、第 76 巻 12 月号、pp. 803-806 (2021).

(岡本祐幸委員)

以上